

水崎 海陽（みずさき・かいよう） 長崎県立長崎西高等学校3年
作品名 私はずいぶん勉強するのか
読んだ作品 『海と毒薬』

この本はずっと私の隣にあった。読んではずんと沈み、もやもやした一日を過ごすことになる。それでいて、頭の片隅では、人間としての良心、モラル、ひいては、これから医療職を目指す私にとっての医療倫理において、いつかは立ち向かわなければならぬこともわかっていく。多くの人の命を救いたいという希望だけで受験期を迎えようとする私にとって、今が難題に最初に向き合う時期としてのリミットだった。私は、勝呂と戸田のどちら側の人間になるのか。宗教の有無、戦争という外的要因を越えたところにある、人間の良心を信じて、本書で描かれている海を見てみようと思った。

本書では、戦争末期、米軍捕虜への生体解剖に関わった人々の心の機微が鮮明に描かれている。私は勝呂の、唯一良心の在処を示してくれるおばはんは無意識に執着しているところや、良心と同調圧力の間で揺れる弱い心に人間らしさを感じた。対して、戸田には何と計算高く、利己的で心無い人間なのかと嫌悪感さえ抱いた。しかし、読み進めるうちに、戸田もまた、実は人間の本質を言い当てられた人物像として描かれているような気がした。私は戸田にもなり得るのではないかと恐れた。「多少の悪ならば社会から罰せられない以上はそれほどその後ろめたさ、恥ずかしさもなく今日まで通してきたのだろうか。」という戸田の言葉が、私の心に波紋を広げたのだ。

私の通う高校はSSHの指定校である。今年、私はプラナリアの切断再生後の脳神経の完全性について調べたいと思っている。しかし、先の研究で、計測の精度を上げるため、カイワレ大根の種子を大量に捨てることとなった事実を振り返ると、今回も膨大な数の生物個体を犠牲にしなくてはならないことが予想できる。そうなった時、前回は多少罪悪感もあったが、実験を繰り返すうちにその気持ちが麻痺していくのではないかと、何か不気味な気持ち湧いてきた。

もちろん、社会的に罰せられることではないが、良心に対しての線引きは、人間のどこにあるのだろう。倫理観とは何だろう。私は小さい頃から、生き物にもそれぞれの魂があり、人間の勝手な欲求で命を奪ってはいけないという教育を受けてきたが、倫理観は人それぞれだ。「あの捕虜のおかげで何千人の結核患者の治療法がわかるとすれば、あれは殺したんじゃないぜ。生かしたんや。人間の良心なんて、考えよう一つで、どうにも変わるもんやわ」という戸田の言葉が表しているように、未来につながる実験であるならば、ある程度の犠牲は仕方なく、罪悪感を持つ必要はないという倫理観もあるだろう。ただ一つ言えるのは、その倫理観は「毒薬」によって変えられてはいけないということ。ここでは、戦争下という状況、同調圧力という「毒薬」に判断を狂わされてしまったが、判断を誤らないように、常に物事に真摯に向き合い、自分の倫理観を形成していくプロセスが人が生きる上で重要なことだと思つた。

しかし、ここで、本書が提示している「神を信仰しない日本人は、自分のことを押し流すような運命に抗うことができないのではないか？」という大きなテーマが絡んでくると、私の理想論だけで太刀打ちできるのかと悩む。日本は恥の文化、欧米は罪の文化であるという言葉を耳にする。神の存在があり、内面の良心を重視する欧米人に対し、日本人が、物事の善悪を周りからの評価によってしか判断せず、自分の信念によらないとすれば、私たちはいつでも勝呂にも戸田にもなり得るのではないだろうか。いつの時代も両者の姿は日本人の象徴であり、一生かけて問い続けなければならない人生の課題なのではないだろうか。

特定の神を持たない私たちにも、歴史上の出来事から時空を超えて、今の自分に照らし合わせて学びを得ることはできる。過去の出来事を俯瞰的に思考する力を身につけることこそが、私の心の拠り所であると気が付いた。そして、神無き中、誰であっても神や独裁者になってはならず、まわりの意見に耳を傾ける。私が学校で勉強する意味はここにあるのだと思った。

正直、読後も、心のもやもやは続いているが、それはそれでいい気がしている。次に読む時には、また新たな感じ方をするかもしれないし、人生の節目や自分が判断に迷った時など、良心への戒めとしてこの本を手にとってみるのも悪くない。今の私は、学校生活において、正しい判断ができる基礎学力を身に付け、多種多様な考えに触れて選択肢を増やし、固定観念を捨て何事にも疑問を持ち解決していくという学びを大切にしたい。まわりの人に良心を示すことができるように成長していきたい。勝呂と戸田が見た黒い海ではなく、私が見る希望の海に続くことを信じて。